博士論文要旨

学籍番号	氏名
2215001	大川　眞智子

論文題目	看護実践研究の特質及び意義に関する研究

目的

本学の博士前期課程における研究活動及び現場看護職と大学教員による共同研究について質的に分析することで、看護実践研究の特質を明確にし、その意義を検討することである。

方法

研究１：看護実践研究を質的に分析するにあたり、その分析枠組みを作成するため、博士前期課程の集団指導における研究指導内容を帰納的に分類し、看護実践研究の構成要素を抽出する。

研究２：博士前期課程の研究活動における看護実践研究の特質を明らかにするために、看護実践研究の構成要素の観点から本学修了者２名の修士論文の記述内容を質的に分析する。また、当該論文を執筆した修了者を対象に面接調査を行う。

研究３：現場看護職と大学教員の共同研究における看護実践研究の特質を明らかにするために、看護実践研究の構成要素の観点から４研究の報告書の記述内容を質的に分析する。また、当該研究に取り組んだ現場看護職と大学教員（各４名）を対象に面接調査を行う。

研究４：研究２・３で導出した特質を検証するため、近年の博士前期課程の研究活動及び共同研究の論文内容を確認する。また、当該研究に取り組んだ研究者（計６名）を対象に面接調査を行う。

結果

看護実践研究の構成要素として、『現状分析から導かれた課題』『職場での立場を踏まえた組織的取り組み』『利用者ニーズを基盤とした改善』『実践改善に向けた取り組みと成果の共有』『意識改革に向けた意図的働きかけとその成果』『連携・関係づくりの強化』が抽出された。

博士前期課程の研究活動における看護実践研究の特質として、【利用者ニーズを基に考案した看護やツールの実績分析による必要な支援の明確化】等が導出された。修了者は、変化する現場の中で実践しながら研究活動に取り組むための方法等を学び、活動の本質や看護職の役割に関する認識を深めていた。また、共同研究における看護実践研究の特質として、【支援に携わる専門職者の意識づくりと知識・意欲の向上、実践の改善を意図した学習的取り組みの実施】等が導出された。共同研究に取り組んだ現場看護職は、看護実践に対する認識の変化や意欲の向上、学びを得ており、職場スタッフの実践改善や認識の深まりが確認された。なお、近年の博士前期課程の研究活動及び共同研究においても、研究２・３で導出した看護実践研究の特質に該当する内容が含まれていた。

考察

看護実践研究の特質は、＜利用者ニーズの観点からの現状分析に基づいた実践上の課題の明確化＞＜利用者ニーズを中核にした看護方法の開発プロセスにおける課題と成果の共有＞＜実践改善に向けた意識改革を図るための意図的働きかけ＞＜組織内外の連携・関係づくりの強化と連携した支援方法の開発＞＜実践改善に向けた組織的取り組みと組織づくり＞に総括された。また、看護実践研究の意義は、実践者に看護実践や研究活動の本質に関する新たな学びの獲得及び認識・行動の変化、意欲の向上をもたらし、利用者ニーズを中核にした組織的な実践改善を可能にすることである。

（別記様式７）

番　号：
平成 28 年 2 月 17 日

平成 27 年度博士論文審査結果報告書

主　査　　北山三津子
副　査　　黒江ゆり子
副　査　　服部律子

平成 27 年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、下記のとおりです。

記

学籍番号：2215001
氏　　名：大川　眞智子

審査結果：　○１．合格　　２．不合格　　３．保留

［審査結果要旨］　（1,000 字以内）

論文題目「看護実践研究の特質及び意義に関する研究」は、博士前期課程における研究活動及び現場看護職と大学教員が共同で行う研究活動を分析事象として、看護実践研究の特質と意義を明確にするとともに、看護実践研究を基盤とした看護生涯学習支援のあり方を探究した研究である。

学生は第一に、博士前期課程における研究指導内容を質的帰納的に分析し、看護実践研究の構成要素として「現状分析から導かれた課題」「職場での立場を踏まえた組織的取組み」「利用者ニーズを基盤とした改善」「実践改善に向けた取り組みの成果の共有」「意識改革に向けた意図的働きかけとその成果」及び「連携・関係づくりの強化」を抽出した。第二に、博士前期課程の研究活動における看護実践研究の特質に関し修士論文の記述内容を構成要素に基づき分析し、「利用者ニーズを基に考案した看護の実績分析による必要な支援の明確化」等を導出した。第三に、現場看護職と大学教員との共同研究における特質に関し研究報告書の記述内容を分析し、「利用者の生活実態・ニーズ及び支援の現状からの実践上の課題の明確化」等を導出した。第四に、上記で導出した特質を近年の修士論文及び共同研究の記述内容に基づき検証した。また各執筆者に聴き取り調査を行い内容から意義を分析した。その結果、看護実践研究の特質として＜利用者ニーズの観点からの現状分析に基づいた実践上の課題の明確化＞＜利用者ニーズを中核にした看護方法の開発プロセスにおける課題と成果の共有＞＜実践改善に向けた意識改革を図るための意図的働きかけ＞＜組織内外の連携・関係づくりの強化と連携した支援方法の開発＞＜実践改善に向けた組織的取組みと組織づくり＞を明らかにし、また意義として「看護実践と研究活動の本質に関する新たな認識の獲得」等を導き、これらを通して看護実践研究を基盤とした看護生涯学習支援のあり方について提言した。これらの過程は的確にデータ化され論述されており、看護実践研究の特質に関する研究として高く評価できる。

審査委員会では、これらの取り組みは本研究科の倫理基準に基づいて実施されており、論旨が明確で一貫性があり、博士論文審査基準に適合するものであることを確認した。当該学生は審査委員会に5回出席し、主査・副査からの質問に答え、かつ直接指導を受け、最終試験に合格した。以上のことから、本論文は博士論文として価値あるものと認める。